スペインの印象

Los Caminos とともに

目次

１．はじめに

２．都市案内

１．アストルガ（Astorga）　4 ページ
２．アビラ（Avila）　8 ページ
３．サアグン　（Sahagun）　15 ページ
４．サラマンカ　（Salamanca）　21 ページ
５．セゴビア（Segovia）　30 ページ
６．トルデシリャス　（Tordesillas）　36 ページ
７．トレド　（Toledo）　39 ページ
８．パレンシア　（Palencia）　46 ページ
９．バリャドリッド　（Valladolid）　50 ページ
10.　ブルゴス（Burgos）　55 ページ
11.　レオン（Leon）　61 ページ

３．コラム

１．バランスの崩れた聖堂　14 ページ
２．ムデハル様式とモサラベ様式　20 ページ
３．プラテレスク　29 ページ
４．鸛（コウノトリ）の巣　38 ページ

４．あとがき

地図

はじめに

スペインには絵になる建造物が多く存在しています。

ローマ時代の土木工事の粋を極めたと言える水道橋。西ゴート王国時代の聖堂やイスラムの入ったモサラベ様式の建物。ロマネスク様式からゴティック様式の聖堂。ムデハル様式の建物。フランスの影響を受けた聖堂。などなど、歴史の変遷に沿って異なる建築様式がそろっています。さらに、新古典様式の城やユダヤ教の聖堂もあります。その規模も外観も内装も変化に富み、見る者に鮮烈な印象を与えています。

強烈な太陽の下で、これらの建造物は色濃い影を落としています。スペインには、このような物理的な「光と影」のみならず、キリスト教徒とイスラム教徒との宗教間の対立から征服・被征服の「明と暗」、大航海時代におけるアメリカの発見や南米を支配し、世界征服を夢見た時代と急速な没落という歴史的な「輝きと曇り」、王家の繁栄と裏に隠れた「光と闇」など、スペインを語る際に必ずと言って良いほどお目にかかる表現である、「光と影」が存在しているのです。

スペインの北部を旅行して、印象的な建造物を描いたのがこの冊子です。ご覧の通りの素人の描いた拙劣な作品です。自己満足している絵も少しはありますが、我ながら少々首を傾げざるを得ないものまで、色々混じっています。これも「明と暗」として、ご笑覧いただければ誠に幸甚です。

街の案内と建造物の簡単な説明を付け加えました。場所は添付の地図をご参照ください。

☆☆　アストルガ　（Astorga）☆☆

紀元 1 年にアウグストゥス皇帝に因み、アストゥリカ・アウグスタ（Asturica-Augusta)と名付けられた偉大なローマ都市です。
3 世紀にはスペインに三か所置かれた司教座の有る街の一つになっており、歴史上重量な位置を占めていたことが分かります。
フランスからサンティアゴへ向かう巡礼路の中で、巡礼者に人気のある町の一つです。

◆　司教館　（Palacio Episcopal）
火災で罹災し、再建にあたり、当時の司教が友人のガウディ（Antoni Gaudi）に設計を依頼して 1889 年に建設が開始されました。バルセロナで建設に当たっていたガウディは設計書を送っただけで、現場には訪れていません。
1893 年に司教が死去すると工事は中断され、結局 20 世紀になって完成しました。お伽の国の城を思わせる建屋は当時から論争を巻き起こしています。
ガウディの偉大な建築はサクラダ・ファミリアを筆頭に、その多くがバルセロナに存在していて、他所ではあまり見られません。
その埋もれてしまっているガウディ建築の逸品をここアストルガで見ることができます。

▲　大聖堂（Santa Maria ）
1471 年にゴティック様式で改築され、その後内部はルネサンス様式に変更され、正面はバロック様に改造された結果、多くの建築様式が混在しています。

聖堂の正面はレオンの大聖堂の西翼廊の扉口を模倣したもので、両脇に塔が建ち、丸窓のある中央棟は扶壁で支えられています。中央扉口の上のティンパヌムにはキリストの十字架降下が浮き彫りにされています。

この絵は聖堂を後陣から見ています。

中央扉口上のキリストの磔刑浮彫彫刻

▲　聖バルトロメ　（San Bartolome）

町で一番古い聖堂です。

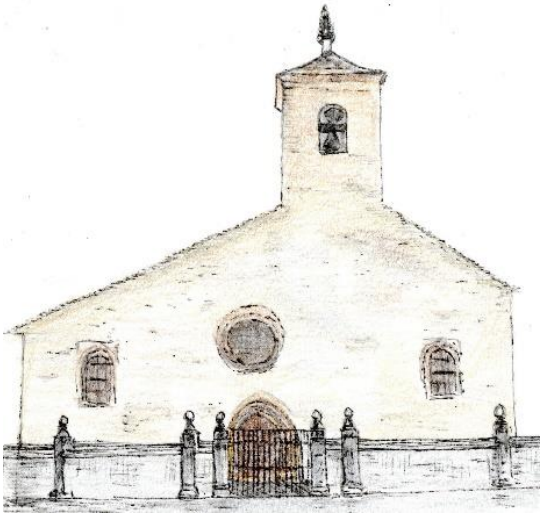
小さな聖堂で、特に目立った特徴もありません。長きにわたり改築を重ねた結果でしょうか、建築様式は混在していますし、ご覧の通り左右のバランスが取れていません。

正面向かって左から８：３：４で配分され、３の部分が一段と高くなって鐘楼が載り、左右は片流れの屋根になっています。

よく見ると、扉口の位置も建屋の中央にはありません。

長く見ていると何故か気になってきます。

⚐　コラム　１をご参照ください。



☆☆　アビラ　（Avila）☆☆

レコンキスタの時代、キリスト教徒の前線基地の街として重要な位置を占めていました。
街は縦 450 メートル、横 900 メートルという長大な城壁で取り囲まれています。城壁の高さは 12 メートルを超えています。その城壁には 88 か所に塔が配置され、9 か所に門があります。
大聖堂の外陣壁も城壁の一部になっています。
丘陵の上に建設された街は遥か彼方からも見渡せ、威容を誇っています。
この街は聖テレサ（Santa Teresa de Avila）の生誕地として、現在でも多くの巡礼者を受け入れています。

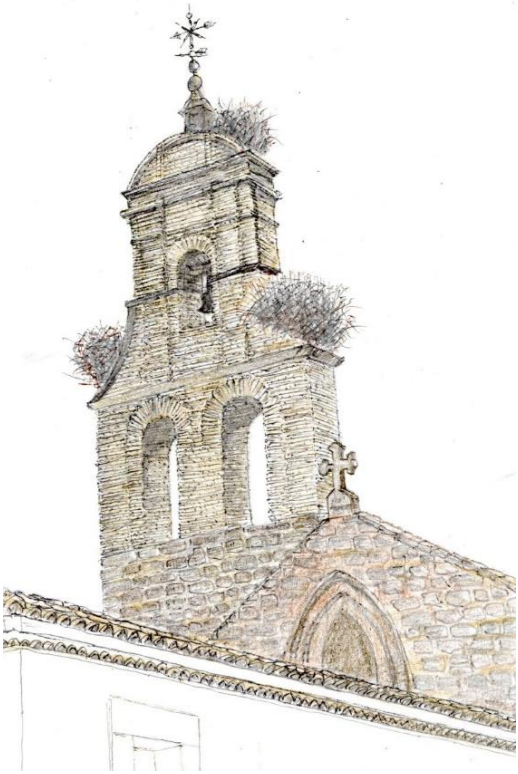
▲　聖アンナ（Santa Ana）

14 世紀半ばに女子修道院として建設され、イザベル女王も幼少期をここで過ごしています。16 世紀に改築された後も王家の子女の教育を行ってきました。

現在では行政機関が入っており、宗教施設ではありません。

信仰心の篤い鸛（コウノトリ）は、今でも聖堂と勘違いしているのでしょうか、鐘楼の上に営巣しています。

⚐コラム　4　をご参照ください



◆　聖ペドロ（San Pedro）

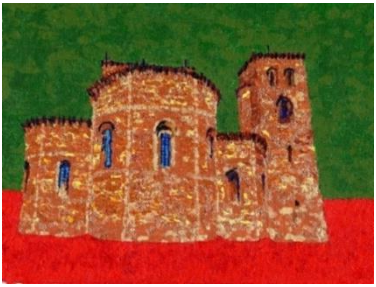
壁の外の東側に 12 世紀初頭に建設されています。

西面する正面には大きな薔薇窓があり、左右バランスの取れたロマネスク様式の聖堂です。

正面の前の聖テレサ広場の奥に巨大な城門が見えています。

後陣には三か所のアプシスが並んでいます。

絵は後陣から見ています。



アビラ市を囲む城壁の門

▲　大聖堂　（San Salvador）

11 世紀に建設されたロマネスク様式の聖堂です。13 世紀から 14 世紀にゴティック様式に改築されています。

正面の大理石で造られた扉口の両脇に鐘楼が聳えていますが、片側は未完成のままです。中央には細かな装飾が施された窓があります。

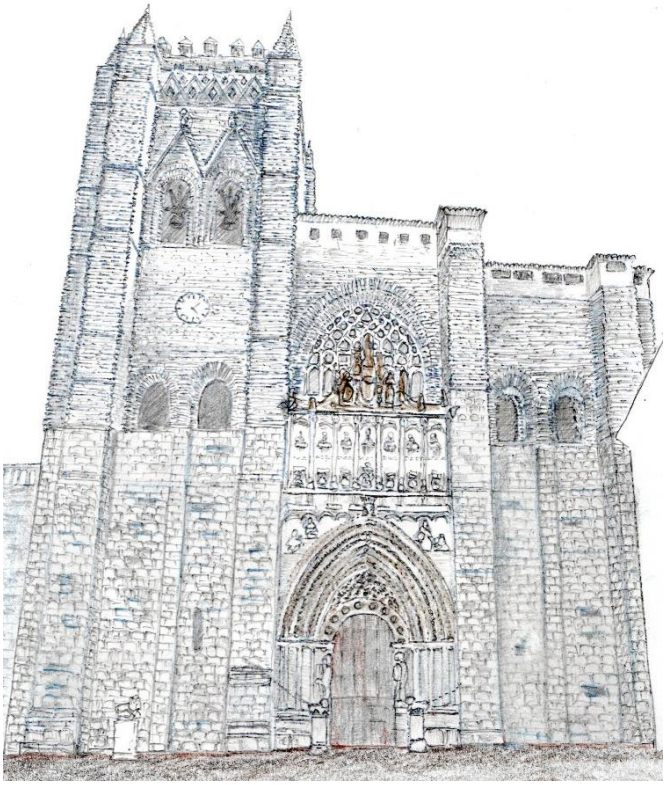
後陣の壁は要塞のような造りで、城壁の一部になっています。

この大聖堂の正面のように左右の均衡が取れていない聖堂は多く見られます。

フランスの歴代の王の墓所であるサンドニ大聖堂　（Basilique Saint-Donis）は同じように片側に鐘楼がありません。シャルトル大聖堂（Cathedrale Notre-Dame de Chartres）では左右で鐘楼の形態が異なっています。

大規模な聖堂を建設するには完成するまでに長い時間がかかります。そのため、建設途中で資金が枯渇する場合もあれば、建築様式が変わってしまう場合もあるのです。

北側にある扉口には聖十二使徒像が並んでいます。
西側が正面扉口になっており、前にはライオンが狛犬のように繋がれています。



正面扉口前のライオン像

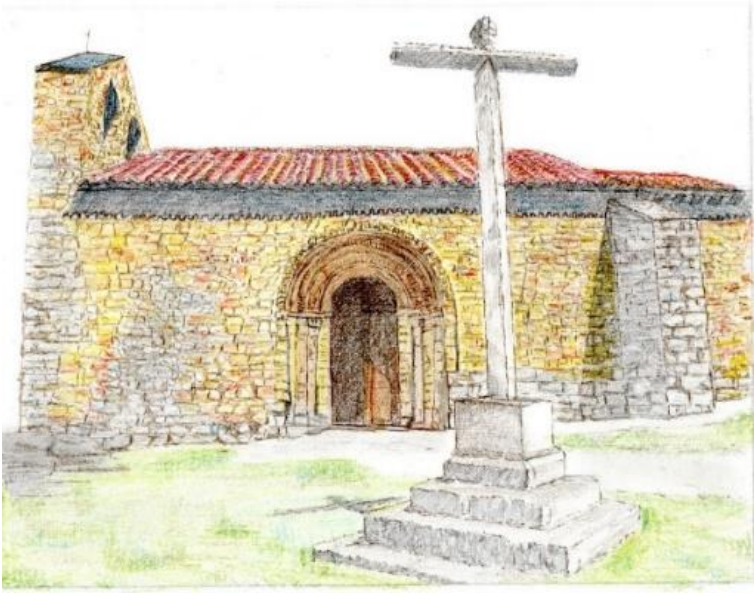
▲　聖セグンド聖堂　(San Segundo)

城壁の西端にある門（Puerta de la Adaja）から外に出て、アダーハ川の手前にあります。12 世紀初頭に建設されたロマネスク様式の小さな聖堂です。

粗末な十字架と半ば壊れた扉からは想像しにくいのですが、この聖堂には、1 世紀に聖使徒の聖ピエトロの命を受けて、ローマからスペインに布教に派遣された 7 人の使徒の一人、聖セグンドの墓所があります。

聖セグンドはアビラの最初の司教になっています。

なお、聖堂内は三廊式になっており、予測以上に内は広く感じます。



⚐ コラム　　1

♡　バランスの崩れた聖堂

アビラの大聖堂のように正面から見て左右の均衡が取れていない大聖堂は多く見られます。
しかしながら、小さな聖堂でもシンメトリを最初から放棄していると思われる聖堂があります。
アストルガの聖バルトロメ聖堂。
パレンシアの聖フランチスコ聖堂。　同じく聖ミゲル聖堂。
バリャドリッドのサンティアゴ聖堂。
ブルゴスの聖エステバン聖堂。をご参照下さい。
これらの聖堂はなぜか落ち着かない印象を与えます。
なぜ片側だけ長いのでしょう。
なぜ鐘楼の鐘が上下・左右と形態が異なるのでしょう。
なぜ片側にだけ側柱があるのでしょう。
なぜ正面の扉口の付柱がこうも大きさが異なるのでしょう。
理由は不明です。
ピカソやダリを生んだお国柄なのでしょうか、このようなバランスの崩れた聖堂をスペインではよく見ることができます。

☆☆　サアグン　（Sahagun）☆☆

フランスからの巡礼路がスペイン国内に入ってから、サンティアゴ・デ・コンポスティラまでの中間地点にある村です。

アルフォンソ 6 世は 1075 年にサアグンを首都に定めています。それ以降、大規模な宮殿や聖堂、修道院が建設されました。

市が立つ繁栄した都だったのです。

しかしながら現在では、巡礼者にとって中間地点にまで到着したという安堵の気持ちを持つだけで、単なる通過地点にすぎません。

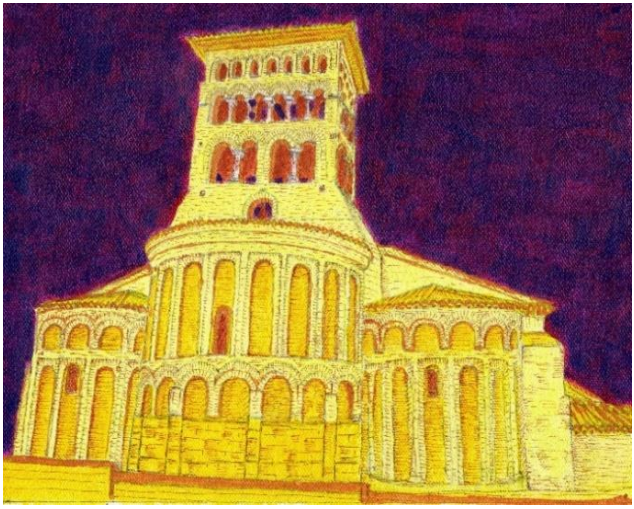
栄枯盛衰を感じさせる寒村です。

観光客が訪れることはありません。

◆　聖ティルソ聖堂　（San Tirso）

11 世紀に建設されたロマネスク様式の聖堂にムデハル様式で改築された部分が混在している聖堂です。

外陣の三か所のアプスから身廊の内陣までは典型的なロマネスク様式の聖堂建築です。



内陣が位置する上に四層のムデハル様式の鐘楼が聳え立ちます。
大きな窓が並ぶ鐘楼は武骨な印象を与えています。

◆　聖ロレンツォ聖堂　（San Lorenzo）

聖ティルソ聖堂同様に、11 世紀のロマネスク様式にムデハル様式が混在建築している聖堂です。聖ティルソ聖堂よりひときわ大きな四層の鐘楼が聳え立っています。

堂々たる姿は都の繁栄を物語っています。
堂の南面に沿って九つのアーチ型が連なる、ポルティコがあり、
西端にはヘスス礼拝堂（Cappella Jesusu）が隣接しています。

▲　門（Arco de San Benito）

村には桁外れの大きさの聖ベニト修道院（Monasterio Real de San Benito）がありますが、現在では廃墟になっています。

高い鐘楼と崩れ落ちた扉口跡が往時をしのばせます。

修道院から少し離れて、この修道院の一部を構成していた、門（Arco de San Benito）の跡があります。この門は現在道幅いっぱいに広がっています。

壁龕に納められた彫像も風化が進み人物名も分かりません。

🚩　コラム　2

♡　ムデハル様式とモサラベ様式

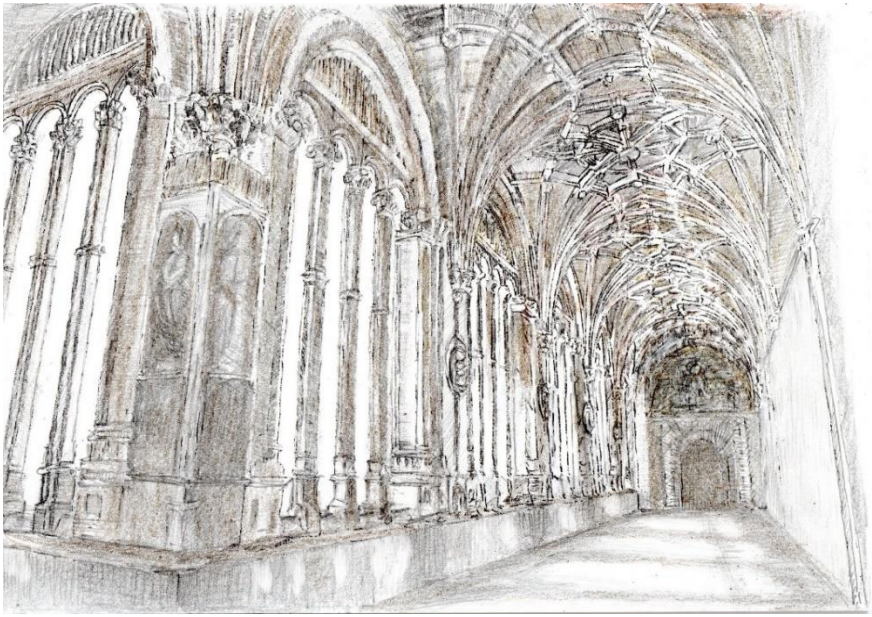
キリスト教とイスラム教の混在した文化を指す言葉です。
スペインならではの文化様式と言えるでしょう。
ムデハル様式はキリスト教の聖堂にイスラム教の様式が融合した建築様式を指します。
ムデハルとはレコンキスタ後にスペインに残ったイスラム教徒を指します。
建築様式としては、15 世紀以降のものを指します。
モサラベ様式とは、イスラム教の支配下でイスラム化したキリスト教の文化様式を指します。
西ゴート王朝時代の文化にイスラム教の文化が融合した時代をさします。
ムデハル様式の聖堂として、
トレドの聖ヤコブ聖堂。
トレドの聖ビチェンテ聖堂。
モサラベ様式の聖堂として、
トレドの聖ルッツ聖堂をご参照下さい。

☆☆　サラマンカ　（Salamanca）☆☆

スペインで最初に大学ができた街です。
アビラが城壁で街を取り囲み、要塞都市として発展したのと対照的に、欧州各地から学者、学生を招聘することで、国際都市として街を発展させてきました。
現在でも留学生が多く見られ、若さの感じられる街です。
トレント公会議に大派遣団を送り込んだドメニコ派の聖堂があります。

◆　聖エステバン　（San Esteban）
1524 年から 1610 年にかけてドメニコ派により建設されています。
1545 年からのトレント公会議にスペイン代表として大使節団を派遣し、大きな影響を与えました。
聖堂前の広場にはその中心人物であり、カソリックを支えたフランチェスコ・デ・ビトリアの彫像が置かれています。
聖堂の正面は見事なプラテレスクで装飾されています。
聖堂内は単廊式ですが、礼拝堂が並び、中央には大きな円蓋が載っています。柱はあたかも金鍍金されたように磨き上げられています。
隣接する広い回廊は王の回廊と呼ばれており、静寂が辺りを包み込んでいます。時間のたつのを忘れてしまいます。

時おり、鶴（コウノトリ）のカタカタという嘴をたたく音が響いて来て、我に返ります。



▲　大聖堂（Santa Maria de la Sede）
16 世紀から 18 世紀まで長期に亘り建設されています。そのため、ゴティック様式からバロック様式の混在する聖堂です。
頑丈な壁はサラマンカの要塞(Fortis salamanca)と呼ばれています。

旧聖堂が狭くなり、隣接して新大聖堂を建設しました。
絵の手前の円蓋が旧大聖堂です。

◆　旧大聖堂（Catedral Vieja）

ロマネスク様式から初期ゴティック様式に移行する際の折衷様式の代表的な聖堂で、シスターシアンの尖塔様式を採用しています。新大聖堂の脇から、旧大聖堂の屋上に登ることができます。

円蓋（Cimborrio）は十二角錐形でうろこ状の石で葺かれています。四隅に小尖頭が立ち、その間の四隅に柱廊を据えることで、見た目を複雑にしています。

◆サラマンカ大学

街のシンボルである大学は大聖堂から歩いてすぐ近くです。

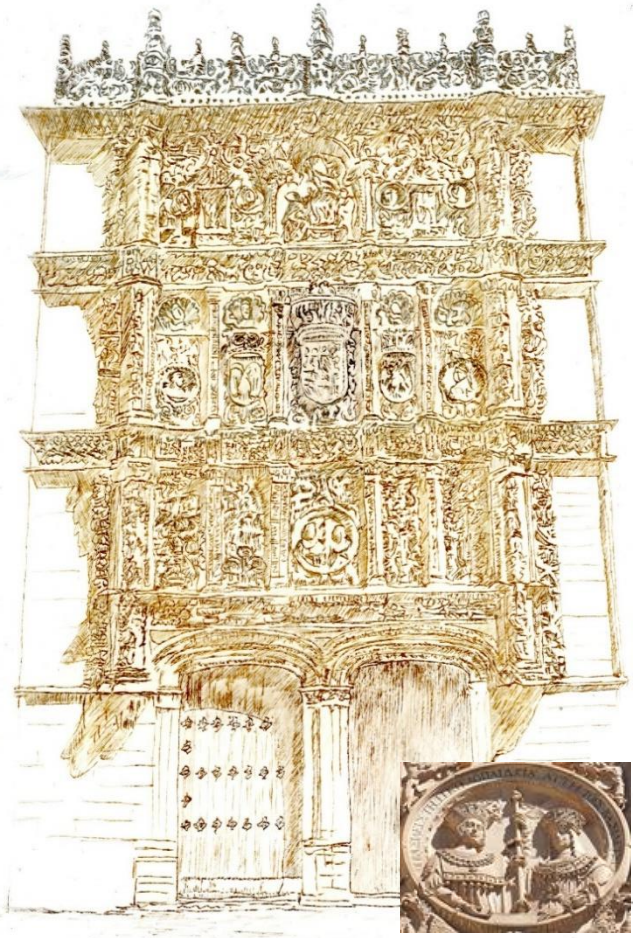
大学の正門前には広場があり、大学に向かって右側には学長室のある建屋があります。

上にはテラコッタ製の複雑な形をした飾りが載っていますが、どれを見ても何を意味しているのかよく分かりません。

奥に大聖堂が見えます。

大学の正面はスペイン建築を代表するプラテレスク様式で装飾されています。プラテレスク装飾の代表例と言われる通り、正に圧巻です。

中央にカトリック両王の浮彫彫刻とメダイオンがあり、アダムとエヴァ、カルロス１世、フアナ１世、などが見られます。



柱に施された『髑髏の上に留まる蛙』の彫刻が見つけられると学業が成就するとの噂で、街のお土産物屋さんでは髑髏と蛙の置物を売っています。

▲　サラマンカ大学神学部（La Clerecia-Universidad Pontificia）
大学は総合大学で多くの学部を展開しています。
神学部は、フィリップ 3 世妃により建設されたイエズス会の聖堂でした。華やかなバロック様式で造られています。
対面には建屋の周辺を貝殻の浮彫彫刻で飾りたてた、観光名所となっている貝の家（Cas del Conchas）があります。その中庭から見上げると神学部の頂上部分が見られます。

⚐ コラム　3

♡　プラテレスク（Plateresque）

16 世紀前半にゴティック様式の建築に採用された装飾で、イスラム様式の装飾にルネサンス様式が合体したものとみられています。聖堂や宮殿の正面などに、聖書を基にしたキリストの公生涯からの場面や王家の紋章、王族の胸像、植物模様などを銀細工師の作品のような繊細さで、浅浮彫彫刻を施した装飾を指します。

正面の全面に装飾が施されたものから、その一部のみの場合など規模は様々です。

サラマンカの大学正面が代表例とされています。

サラマンカの大聖堂。

トレドの聖十字架聖堂。

バリャドリッドの聖ペドロ聖堂。

バリャドリッドの聖フアン・デ・レトラン聖堂。

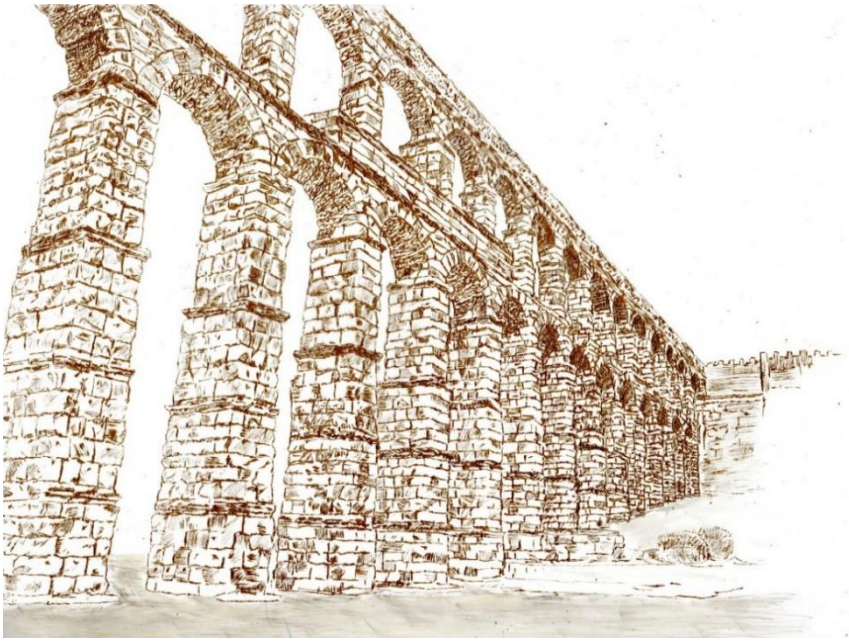
ブルゴスの聖コスメとドミアン聖堂。

レオンの聖イシドロ聖堂。　をご参照ください。

☆☆　セゴビア　（Segovia ）☆☆

マドリッドから 80 キロメートルほど北に位置する街です。
マドリッドから鉄道でもバスでも気軽に訪問することができます。
紀元前からケルト人が住んでいたとされる古い歴史の有る街で、ローマ、イスラムの支配を経て、カステリア王国の国王たちが好んで住んだ城のある街です。
多くの歴史的建造物があり、旧市街はユネスコの世界遺産に指定されています。

◆　ローマ時代の水道橋
紀元 1 世紀から 2 世紀初めにかけて建設されました。
長さは 818 メートル、高さは 29 メートルあり、橋梁は 167 あります。長さ高さ共に圧倒的なスケールを誇っています。
ローマ人の土木建設の粋を見せつけられます。全体を見渡すのは困難です。
ローマ人は各地に巨大な建築を残していますが、よくこんな巨大なものを造ったものだと感心してしまいます。



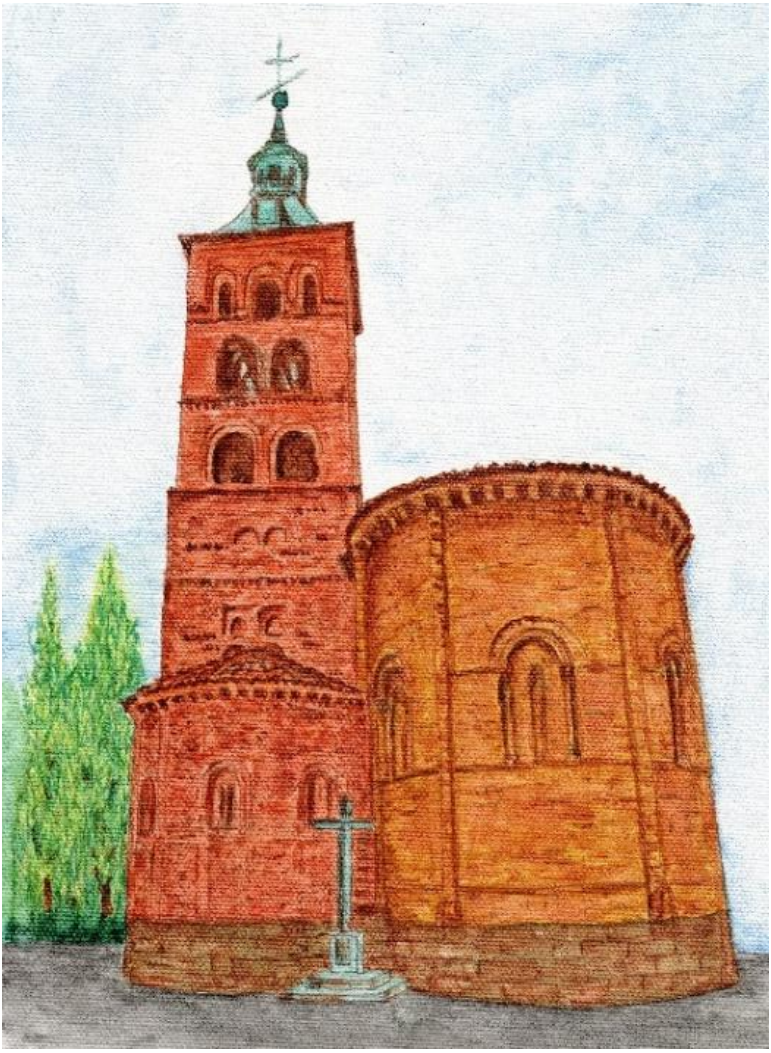
◆　聖アンドレス聖堂（San Andres）

城に向かって坂道を登って行くと見えてきます。

12 世紀のロマネスク様式で造られた均整の取れた美しい聖堂です。

後陣から見ると石材が異なり、改築されたことが分かります。

14 世紀には修道院を併設しましたが、現在では廃院になっています。



▲ 聖ミラン聖堂 (San Millan)

城壁の外にあります。

11 世紀のロマネスク様式の聖堂です。

アラゴン王国の首都であったハカ（Jaca）の大聖堂を模して造られましたが、側面の柱廊がこの聖堂の独自性を出しています。鐘楼の表面や馬蹄形の窓はモサラベ様式の名残をとどめています。

▲ 城（Alcazar）

12 世紀初頭に建設されています。

アルフォンソ 10 世、イサベラ女王などカステリア王が好んで住んだ城です。シンデレラ城のモデルになった城だと案内に出ていました。

▲　聖フストと聖パストル聖堂（Santos Justo y Pastor）
ローマ水道橋の東に位置し、繊維業者が多く住んでいた地域にあるロマネスク様式の聖堂です。古いフレスコ画も残っています。
寄棟造りの鐘楼の屋根には、頂点と隅に鸛（コウノトリ）の巣が四箇所見えます。少々混雑しているようですが、どのように住み分けているのでしょう。
⚐コラム４をご参照ください。

☆☆　トルデシリャス　（Tordesillas）☆☆

バリャドリッドから 40 キロメートルほど南西に位置しており、公共交通機関としてバスが往来しています。
14 世紀初頭にアルフォンソ 11 世が王宮を建設したことで貴族も移り住み街は発展しましたが、現在では観光客もほとんど訪れない静かな町になっています。
この町は 1492 年に起きた世界的な事件と関連しています。

▲　条約締結館

1492 年にコロンブスがアメリカ大陸を発見した後、新世界への航海が盛んになり、それに伴い新領土取得の紛争が発生してきました。

当時の大船団派遣国であった、スペイン王国のフェルディナンド 2 世国王とポルトガル王国のジョアン 2 世国王は　1494　年

6 月 7 日、新世界の領土を二分割する条約をこの町で締結しています。この取り決めは教皇からもお墨付きを得ています。
条約が調印された建屋は今でも資料館として存在しています。

▲ 聖クレア修道院（Santa Clea）
1492 年にグラナダの陥落で、イベリア半島からアラブ勢力が放逐され、レコンキスタは完成します。しかしながら、イベリア半島の政情は相変わらず不安定で、王位継承も混乱していました。
イサベラ女王の崩御後に、1504 年カステリア女王となったフアナは夫のフェリペ 1 世が逝去した後、精神を患い、半世紀近くも王宮を改築した修道院に幽閉されていました。
スペイン史の暗闇の一つと言えます。
鐘楼の右上で鸛が子育て中でした。

⚐　コラム　4

♡　鸛（コウノトリ）の巣

聖堂に近づくとカタカタという音が響いて来て、見上げると鐘楼の上に鸛の巣が見えることがあります。

トロイの王女アンティゴネは向う見ずにも大神ユピテルの妃ユノーと美を争い、女王ユノーにより白い翼に包まれた鳥に変身させられてしまいました。それでもカタカタと、嘴を鳴らすことで自分の美しさに喝采を送っているのです。あの鸛が彼女なのです。

『変身物語』（岩波文庫）にこのような話が載っています。

町一番の高い建物でも、町村役場の屋根の上には巣を造らず、聖堂の屋根か聖堂脇の鐘楼の屋根に営巣しています。
鸛は虚栄心が強いばかりでなく、信仰心の篤い鳥とも言えるのではないでしょうか。
教会側も鸛の信心深さに応えて、営巣し易いように網を張っているところもあります。
アビラの聖アナ修道院。
セゴビアの聖フストとパスカル聖堂。
トルデシリャスの聖クレア修道院。
レオンの聖アナ聖堂。　をご参照ください。

☆☆　トレド　（Toledo）☆☆

ローマ帝国の支配後、6 世紀には西ゴート王国の首都として繁栄しました。8 世紀以降は長らくイスラム教徒に征服されていました。12 世紀にはアラビア語の書籍をラテン語へ翻訳する事業の一大拠点となり、古代ギリシャ・ローマの古典が広く西欧に伝播していくことになります。
街中の道はイスラム教の街でよく見られるように、狭くて曲がりくねっており、複雑に交叉して、見通しの良い道はほとんどありません。
多くの歴史的建造物が残っていますが、訪問するにはしっかりした地図が必要です。

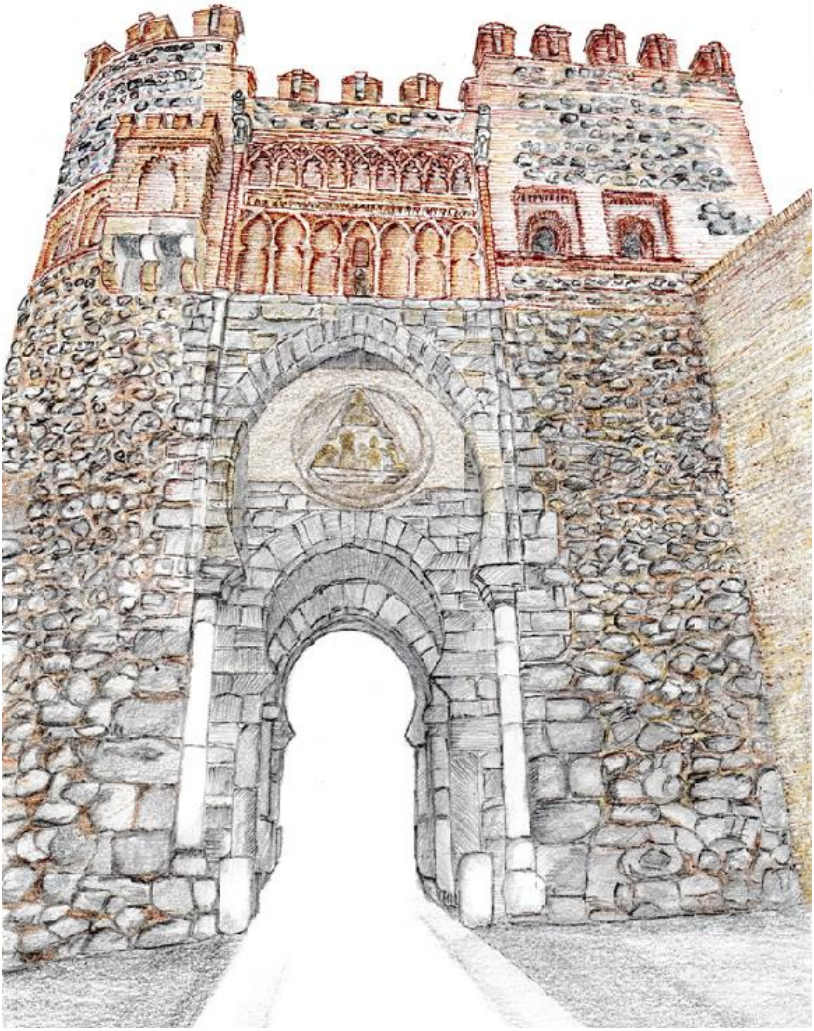
◆　大聖堂（Santa Maria ）
6 世紀に建設された聖母聖堂は 8 世紀にイスラム教のモスクに改築されました。レコンキスタを機会にキリスト教の聖堂として再建されています。
後期ゴティック様式、ムデハル様式、ルネサンス様式、さらにはバロック様式まで混在しています。
側廊の外側に城壁のように礼拝堂がならび壮大な規模の大聖堂になっています。
正面からでも全体を見渡すことはできません。
なお、正面の鐘楼は片側が未完成のままです。

◆　太陽の門　（Porta del Sol）

トレドの街に入る城壁を固めている巨大な門です。

14 世紀にヨハネ騎士団により建設されています。

太陽の門とは、東を向いているから、という説と表裏に太陽と月が描かれていたから、という説があります。



◆ 聖十字架聖堂　　(Santa Cruz)

15 世紀に救済院として建設された建屋です。現在では総合博物館になっています。

正面は聖書を基に、キリストの公生涯を中心とした場面がプラテレスクで飾られています。

館内にはエル・グレコの作品も数点展示されています。

なお、エル・グレコの作品は、聖トメ（Santo Tome）聖堂の他に、エル・グレコ

美術館で見ることができます。

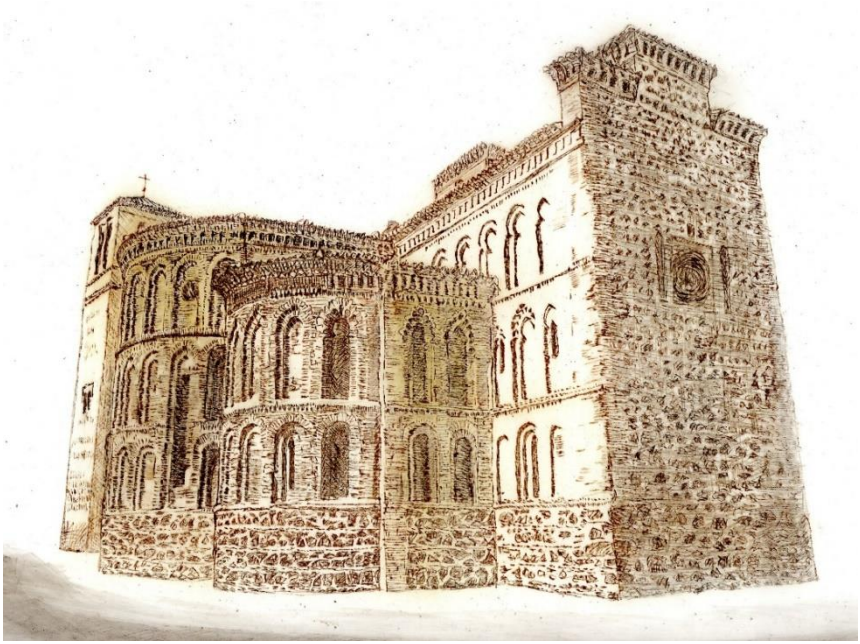
エル・グレコ作「ベロニカ」

◆　アラベルの聖ヤコブ聖堂（Santiago el Mayor）

城壁の外にあります。

アルフォンソ 4 世の下で建築され、13 世紀に改築されています。

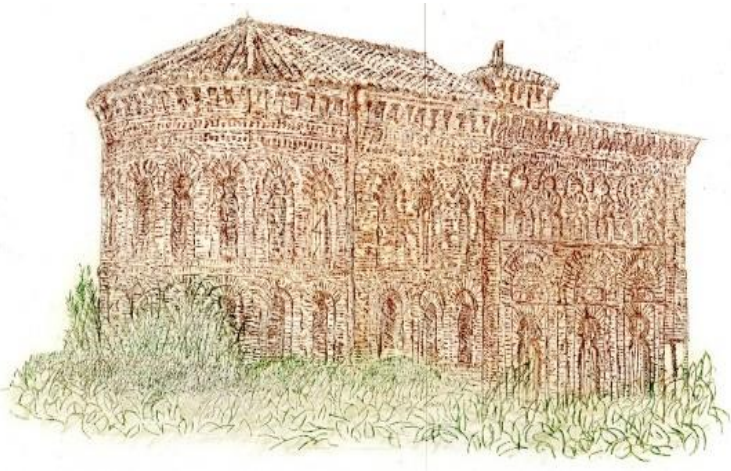
内装は 18 世紀末に改装されています。鐘楼や、外装はロマネスク



様式をとどめています。
なお、馬蹄形をしたブラインドの窪み窓は典型的なムデハル様式を示しています。

▲聖ビチェンテ聖堂（San Vicente）
11 世紀末には存在していたとされる古いロマネスク様式の聖堂です。
後陣にアーチ型の窪み窓が見られ、ムデハル様式を示しています。
現在では聖堂としての役目を果たしておらず、一部が文化センターになっています。

▲　聖ルッツ聖堂　　（San Luz）
キリスト教の聖堂がイスラム教のモスクになり、またキリスト教の聖堂に戻った経緯があります。歴史に翻弄されてきました。
側面には細かな煉瓦を積み上げたイスラム教特有の模様が見られます。
モサラベ様式の古い聖堂です。



▲　サンタマリア・ラ・ブランカ（Santa Maria la Blanca）

トレドにはキリスト教の聖堂にイスラム教のモスク、それにユダヤ教のシナゴーグが併存していました。

12 世紀以前に存在していたシナゴーグを改築したのか、モスクをシナゴーグに改築したのか詳細は不明です。

室内には 24 本の八角形の柱が林のように並び、その上には馬蹄形のアーチが載っています。モスクのような印象を与えます。

☆☆　パレンシア　（Palencia）☆☆

紀元前にはケルト人が居住していたようです。3 世紀にはカソリックの聖堂が建設され、司教座のある大聖堂が存在していました。
パレンシアの守護聖人の聖アントリンを奉じる大聖堂は街の規模にふさわしくないほどの壮大さです。

◆　大聖堂（San Antolin）
聖アントリンは 7 世紀の西ゴート王国時代の聖職者です。
7 世紀に建設された聖堂を地下聖堂とし、その上にロマネスク様式の聖堂を建設しています。
正面の脇にはゴティック様式で、天を突くばかりの巨大な鐘楼が追加されています。正面扉口の脇には聖人の人型柱が並び威容を誇っています。
聖堂は長さ 130 メートル、幅 50 メートルという巨大な大きさで、聖堂内の造りも装飾も見事です。
ただし、祀られた聖人の知名度が低いせいでしょうか、街の知名度が低いせいでしょうか、参拝者は少ないようです。

◆　聖ミゲル聖堂　　(San Miguel)

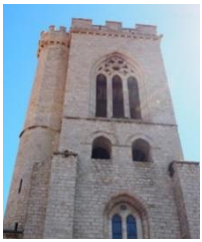
ロマネスク様式とゴティック様式が混在しています。

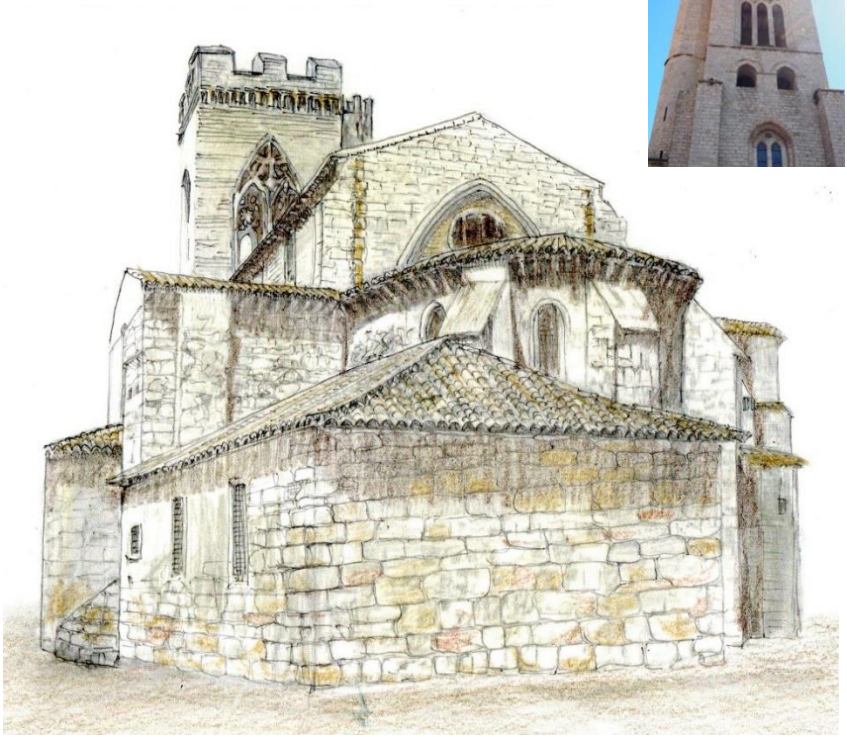
川に面する正面の扉口の上には巨大な鐘楼が要塞のように聳え立ち、街のシンボルになっています。

正面から見ると、高い鐘楼の片側にのみ半円筒形の塔が側柱のようについています。

バランスの崩れている聖堂は結構あるのです。⚐コラム　１をご参照ください。

絵は後陣から見たものです。





▲　聖フランチェスコ聖堂　（San Francisco）

聖堂の正面には柱廊が控える規模の大きな聖堂です。

薔薇窓の上には横二連式の鐘が載っていますが、その右隣には大きめの鐘と小さな鐘が上下に並んでいます。

右側の高い鐘楼は独立しているように見えながら、同一平面上にあるので、奇妙な印象を与えます。

しかも薔薇窓は鐘楼全体の中央に位置していません。

また、聖堂手前の柱廊のアーチも大きさや形状、数が統一されていません。

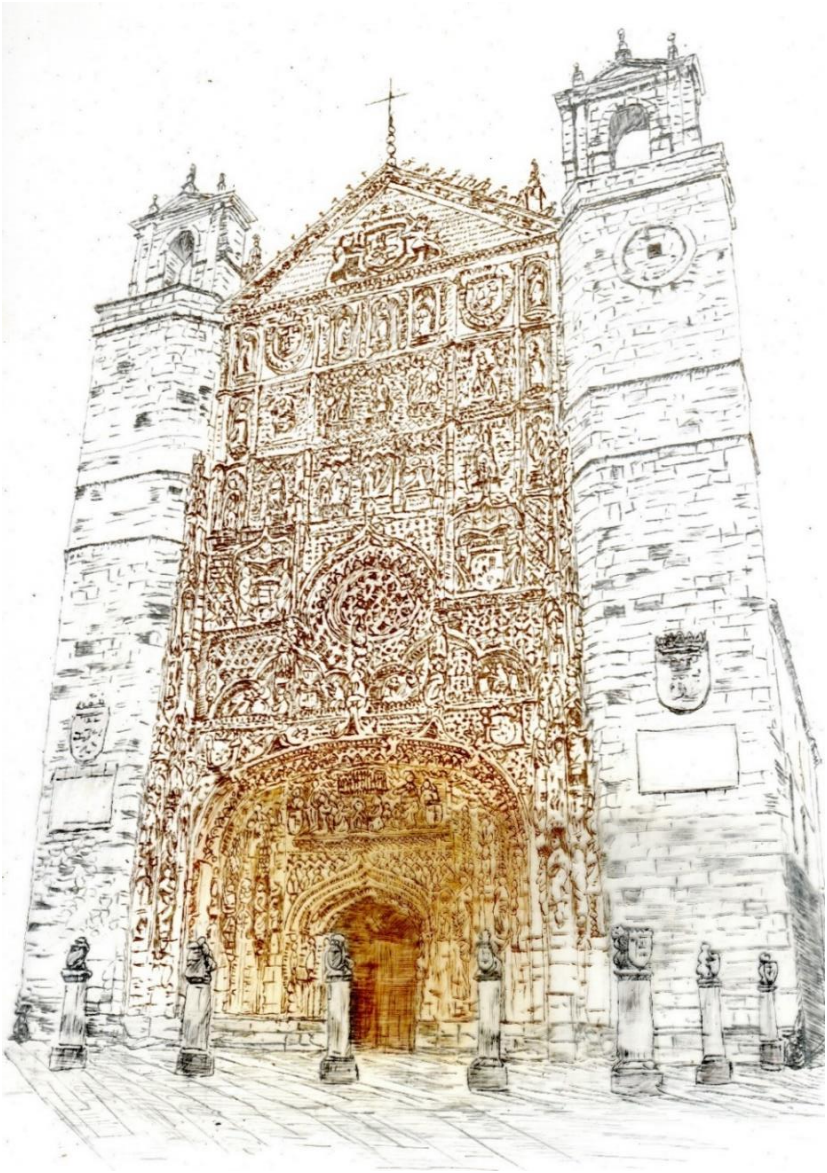
増改築の歴史を調べれば理由が判明するのかもしれません。

⚐コラム　1　をご参照ください。

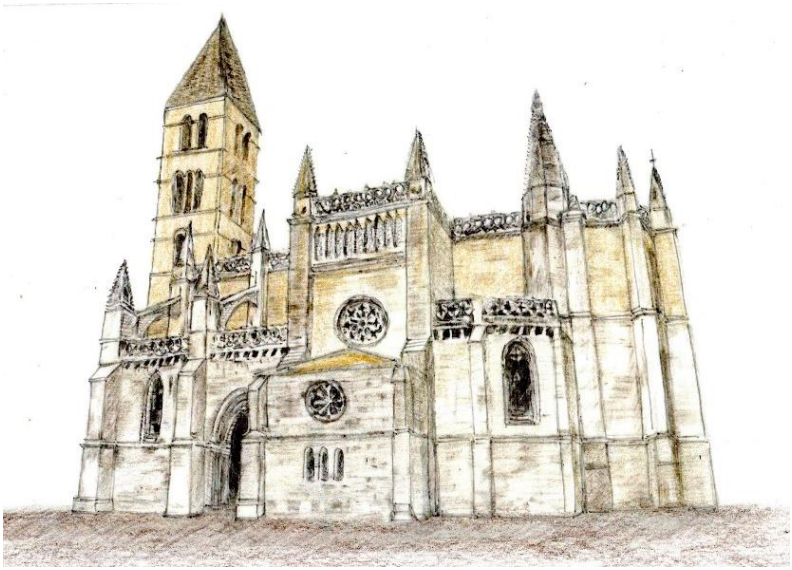
☆☆　バリャドリッド　（Valladolid）☆☆

マドリッドから北西に 160 キロメートルにある街です。
1469 年カステリア女王とアラゴン王がこの地で婚礼を挙げ、両国が合併してエスパーニャ王国となり、首都に定めています。
14 世紀開学の大学や、正面の大部分がプラテレスク装飾で飾られた元宮殿の国立彫刻博物館、セルバンテスが滞在していた館など見どころの多い街です。コロンブス終焉の館は博物館になっています。
街の規模からの、市内を移動し易いバスの運行と言い、買い物のし易い繁華街の存在と言い、住みやすそうな、清潔で落ち着いた古都です。

◆　聖パブロ聖堂　（San Pablo）
1276 年の建設です。15 世紀半ばに再建された後も 17 世紀まで改修が継続して行われました。
正面は中央に薔薇窓の有るゴティック様式ですが、全面が過度なまでに細密なプラテレスクで装飾されています。両脇に控える装飾の施されていない塔がコントラストを示しています。
湾曲した扉口の上には多くの像と王家の紋章が細かな浮彫彫刻で飾り付けられています。



▲ サンタマリア旧聖堂　　（Santa Maria dela Antigua）
大聖堂の脇にあります。
11 世紀後半にロマネスク様式で、建設された古い聖堂ですが、現在では建設当時の面影は鐘楼に残すだけになっています。
端正な聖堂に改築されています。

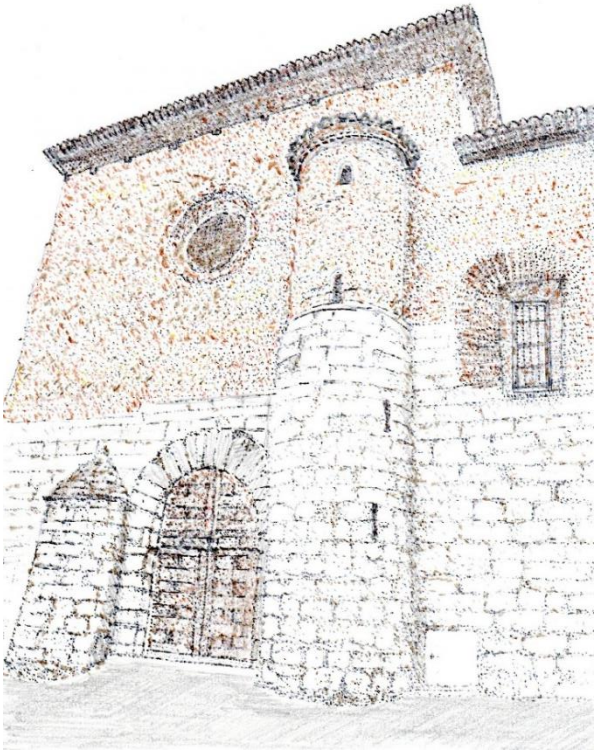


▲ 聖フアン・デ・レトラン聖堂（San Juan de Letran）
大きな聖アゴスティノ（Convent de los Agustinos Filipinos）聖堂の付属建屋は現在では東洋博物館になっていますが、その博物館に隣

接しています。
正面の扉口の周囲とその上層にはプラテレスク装飾が施されています。

▲サンティアゴ聖堂　（Santiago Apostol）
街の中心にあるマイヨール広場の近くにあり、繁華街の真ん中にある、古くて小さな聖堂です。
正面の扉口脇の左右の付柱の太さ長さが極端に異なっています。
当初は大きな付柱一本で充分と考えたのでしょうか。それとも小さな付柱の後で、太い付柱での補強が必要になったのでしょうか。
資金繰りのせいで揃えられなかったのでしょうか。
なんともバランスが取れていません。

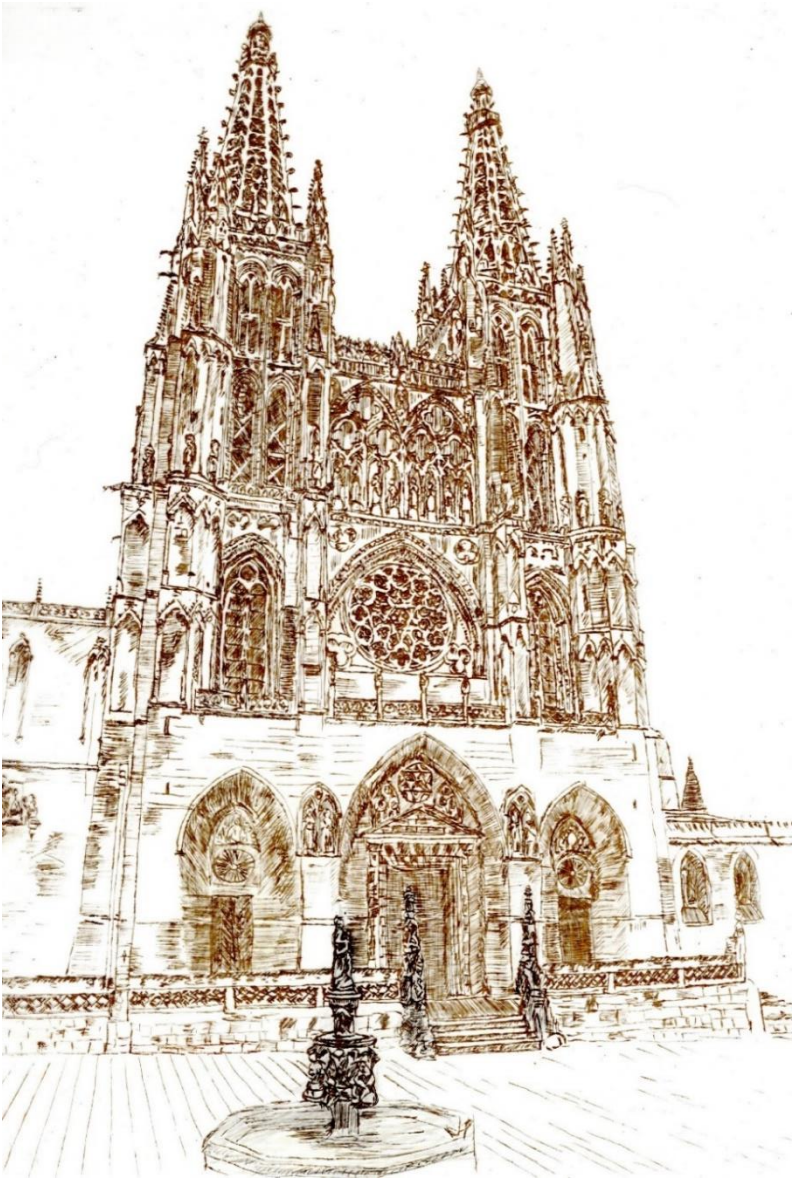
⚐　コラム　1
をご参照ください。

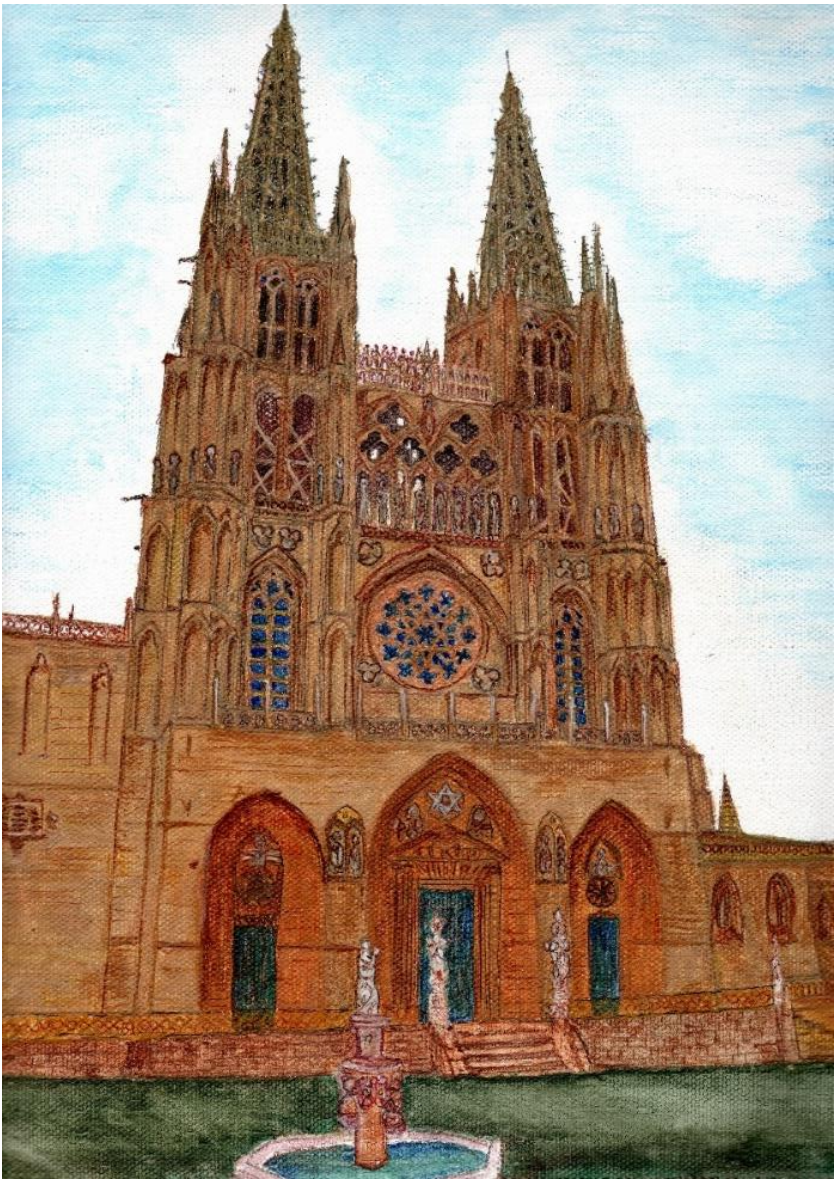


☆☆　ブルゴス　（Burgos）☆☆

9 世紀末にアストゥリアス(Asturias)王国の要塞が建設されたことから街が発展してきました。
11 世紀にはカステリア王国の首都になっています。
街はアルランソン(Arlanzon)川に沿って展開しており、サンタマリア門を扱ぐって、北側の旧市街に入ることになります。

◆　大聖堂　（Santa Maria ）
1567 年に完成しています。
正面に扉口が三か所並び、中央には薔薇窓、左右に六角形の尖頭を頂いた矩形の鐘楼が立つ大きな聖堂です。
正面の両脇に塔が立ち、フランスのランス（Rheims）の大聖堂やドイツのケルンの大聖堂に類似しています。
スペインで最も美しい聖堂とされ、スペイン-ゴティック様式の最高峰です。
まさに聖堂の貴婦人ともいえる、見応えの有る聖堂です。
聖堂の正面の広場には聖母子の像のある噴水が置かれています。
外観の雅やかさに劣らず、広い聖堂内は隅々まで繊細な装飾で飾られています。
黄金の衝立の煌びやかは見事です。





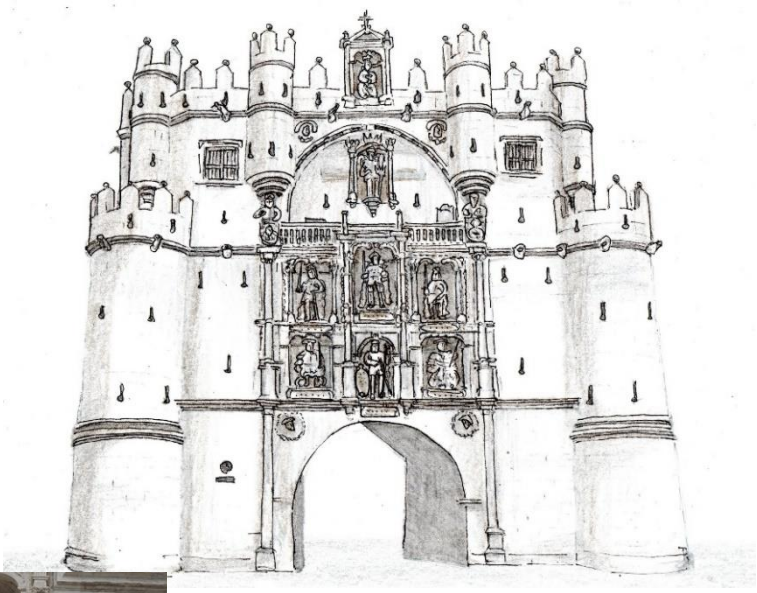
▲　サンタマリア門　（Arco de Santa Maria ）

市内に 12 か所ある門のなかで一番大きくて有名な門です。

1516 年にスペイン王を兼ねることになった、神聖ローマ帝国皇帝カール 5 世（スペイン王としてはカルロス 1 世）のために凱旋門として再建されています。

門の上部には聖母子、大天使ミカエルの像が収められていますが、中央にはカルロス 1 世の像が据えられ、レコンキスタの英雄のエル・シドを含む英傑、王侯貴族の像が皇帝を囲んでいます。

この門を抜けると大聖堂前の広場に出ます。



カルロス 1 世とエル・シド

▲聖コスメとドミアン聖堂（San Cosme y Domian）
サンタマリア門から城外に出て、アルランソン（Arlanzon）川を渡り、南に向かうと見えてきます。
小さな聖堂ですが、正面扉口の上には磔刑のキリスト像などがプラテレスクで装飾されています。
⚐　コラム　3　をご参照ください。

▲　聖エステバン聖堂　（San Esteban）

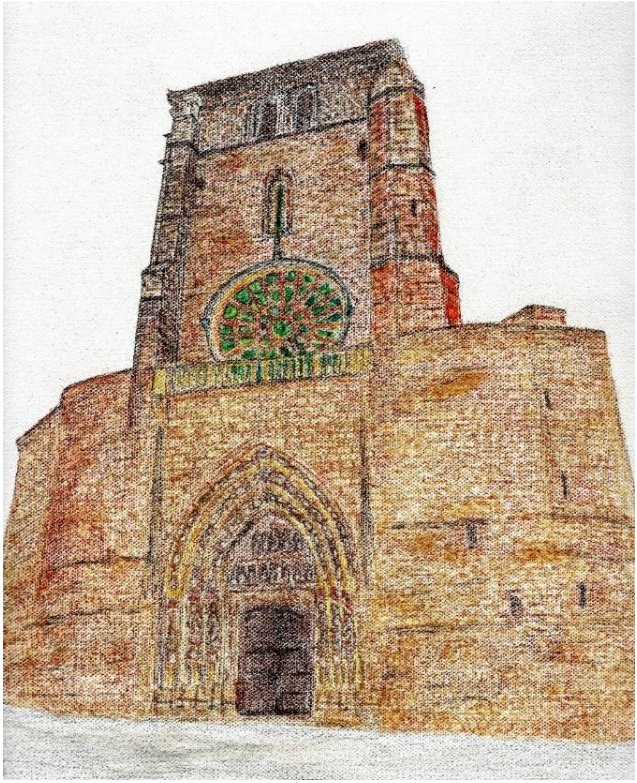
大聖堂と城の間の丘の上にある大きな聖堂です。

13 世紀に建設されています。城塞のようなごつい造りで、正面は湾曲しています。

中央に大きな薔薇窓があり、その上にはアーチ型の窓がありますが、両脇の付柱は見るからに太さが異なります。

⚐ コラム　１をご参照下さい。

現在では祭壇を展示する博物館になっています。



☆☆　レオン　（Leon）☆☆

紀元前のローマ時代からの街で、西ゴート王国を経てアストゥリアス王国からレオン王国の首都として繁栄しました。更にカステリア=レオン王国となり 1240 年にレオン王国が滅亡してカステリア王国となります。
王家の墓稜であった聖イシドロ聖堂やサンティアゴ騎士団の聖マルコ聖堂など由緒ある聖堂があります。
古都の趣を残す落ち着いた街です。

▲大聖堂　（Santa Maria）
ローマ時代の浴場跡に建設された聖堂で、ロマネスク様式からゴティック建築に改築を重ね、1472 年に完成しています。
フランスのランス大聖堂を参考にしたとされています。聖堂内は三廊式で天井までがステンドグラスで飾られています。
正面は 2019 年当時修理中で前面が布で覆われており、見られませんでした。
絵は南翼廊の扉口です。
なお、大聖堂博物館から回廊に出ると中庭には等身大の聖母を頂く大きなモニュメントが置かれています。南翼廊の薔薇窓の内側が見られます。

南扉口

回廊内から南扉口方向

▲聖アンナ（Santa Ana）
旧市街の南の外れにある小さな聖堂です。
祭壇には聖イシドロがイスラム教徒を駆逐している浮彫が飾られています。
鐘楼の上には鶴（コウノトリ）が営巣していました。
巣を守る金網が見られます。
⚐　コラム　４をご参照ください。
　絵は正面と裏から。

　正面からは鐘が三個見えます。

▲聖イシドロ聖堂　（Basilica de San Isidoro）

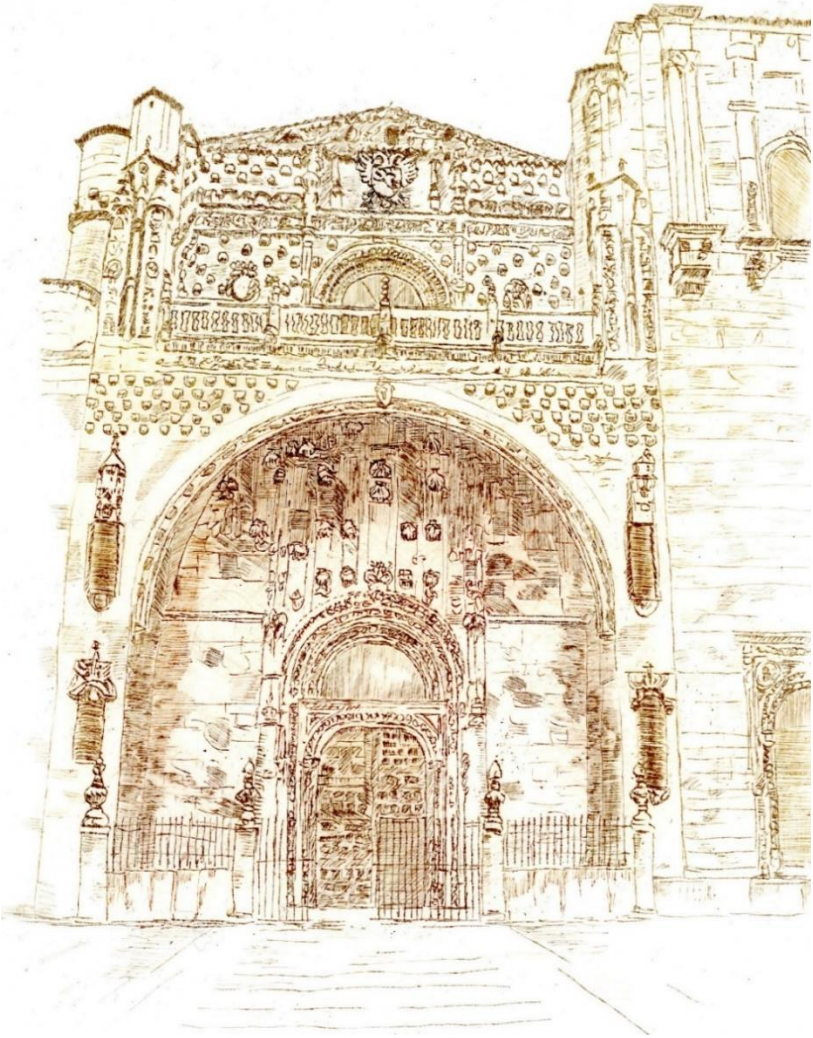
ローマ時代の神殿跡にロマネスク様式で洗礼者聖ヨハネを奉献して建設されていましたが、1063 年にアルフォンソ 5 世（Alfonso V）により、新たにセヴィラ（Sevilla）の聖イシドロに奉献して建設されています。

歴代の王家の菩提寺で、多くの王侯貴族が埋葬されています。

中央扉口の一番上には馬に乗り、イスラム教徒を駆逐する聖イシドロの彫刻が載っています。

◆ 聖マルコス聖堂(San Marcos)

11 世紀のロマネスク様式の聖堂で、扉口には多くの貝殻の彫刻が



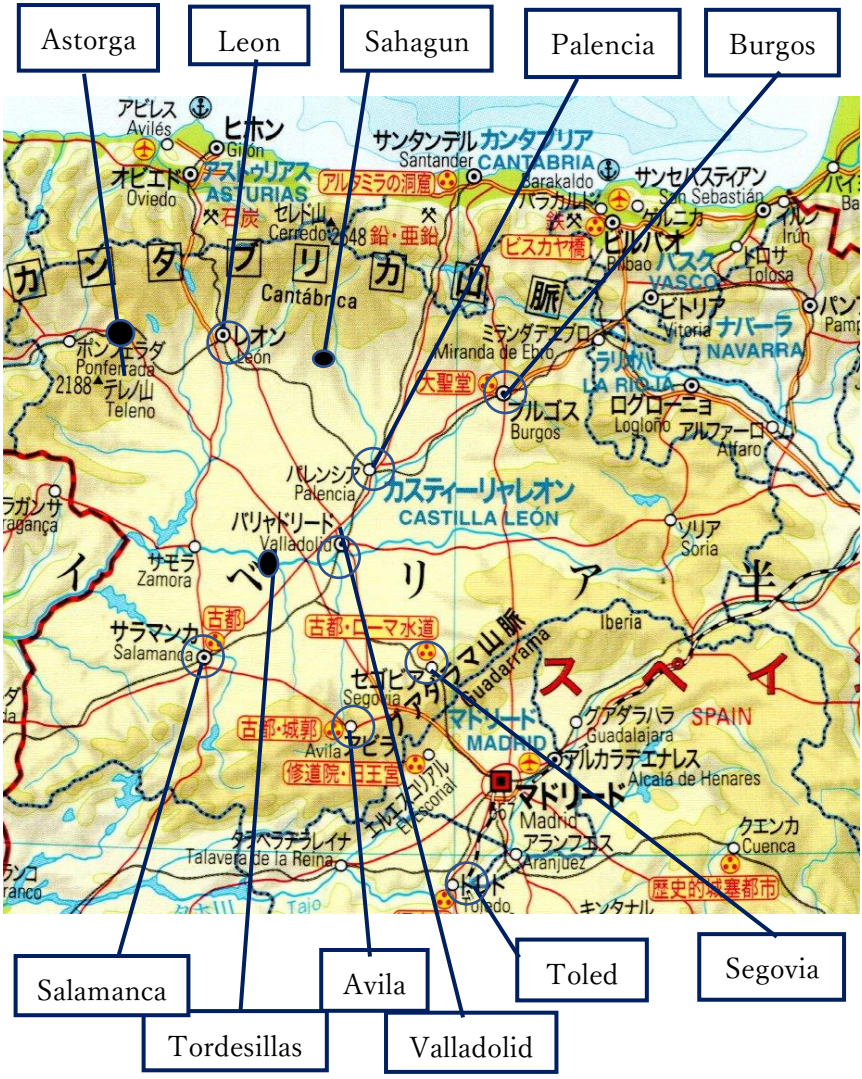
ちりばめられています。
隣接する修道院（Convent de San Marcos） は巡礼者の宿として建設されましたが、その後サンティアゴ騎士団の本拠地として使用されていました。
現在では豪華なホテル（Parador ）になっています。

▲聖メルカド聖堂　（Neustar Senora del Mercado）
グラーノ広場（Plaza del Grano）の南側にある、ロマネスク様式の小さな聖堂です。
窓枠の石積は風化しており、歴史を感じさせます。
聖堂の脇には 2 頭のライオンが王家の紋章を掲げています。
聖堂が建設されたのは、12 世紀のボルゴーナ王朝（Borgona）のアルフォンソ 7 世の時代です。この王家はイタリア出身で、フランスで伯位を得て王家に繋がっている

ことから、フランス王家の百合の紋章を掲げているようにも思えます。
しかしながら、このライオンのあどけない表情はロマネスク様式ではありません。
掲げる王冠の形状から推測するとこのライオンは 16 世紀のフィリッペ 2 世の時代に設置されたと思われます。

あとがき

サンティアゴ・デ・コンポスティラはあこがれの巡礼地です。
巡礼者のように荷物を担いで巡礼地まで歩いたわけではなく、単にバスや電車の公共交通機関を利用して、巡礼路上の街や村を訪問して滞在してきただけです。
巡礼路から離れた小さな町にもバスを乗り継いで出かけてきました。
撮り溜めた写真を基に、描いたのがこの冊子です。
また行きたい、との思いを胸に描いたものです。



出典:　二宮書店　基本地図帳　平成 21 年 1 月